



## 支援員養成講座4 発達障害と合理的配慮④

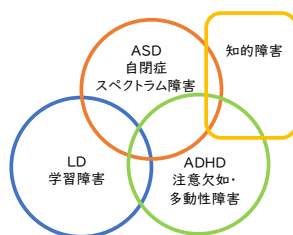
### 知的障害(知的発達症)

## 知的障害

- 知的能力と社会生活への適応能力が低いことで、日常生活における困難が発達期(18歳以下)に生じている状態のこと
- 重症度により軽度、中等度、重度、最重度に分類される。

1

2



## 療育手帳について

- 知的障害のある方が申請できる障害者手帳。
- 療育手帳を持つことで障害の証明となり、生活や就職に役立つサービスを受けることができる。
- 「愛の手帳」(東京都・横浜市)  
「みどりの手帳」(さいたま市) など
- 1度が最重度、2度が重度、3度が中度、4度が軽度の4つの区分に分かれています。

3

4

## 知的障害の程度の分類について

年齢区分	IQ	ADL	知的障害
I	IQ < 20	1~30%	最重度の障害
II	IQ 20~35	30~50%	重度の障害
III	IQ 35~50	50~70%	中度の障害
IV	IQ 50~70	70~100%	軽度の障害

厚生労働省「知的障害児(者)基礎調査：調査の結果」

## 知的障害の程度の分類について

- |         |                                                                                     |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 1度(最重度) | 会話によるコミュニケーションは生涯難しいことが多い。身辺、健康、安全など多くの面で支援が生涯必要。                                   |
| 2度(重度)  | 幼児期は特に会話が難しい。学齢期以降、身振りなどでコミュニケーションが可能になる場合がある。                                      |
| 3度(中度)  | ことばを話すこともあるが、コミュニケーションに使用することは難しく、独り言であったりする。学齢期には、一部読み書きなど可能になる場合もあるが、ある程度の水準に留まる。 |
| 4度(軽度)  | 就学前には発達の遅れがわからないことがある。学齢期に、読み書き、計算など学習が一部可能になるが、抽象的な理解は難しい。身の回りのことは年齢相応にできることが多い。   |

5

6

## 知的障害のある子どもへの支援

- 障害のあらわれ方は個人差が大きい
- 軽度のタイプでも抽象的な表現を理解することが苦手であったり、未経験の出来事や状況の急な変化への対応が困難な場合が多い
- 知的な理解力に合わせた支援が重要  
年齢に応じた対応を心がけましょう!



7

## ダウン症(ダウン症候群)

- 通常、21番目の染色体が3本あることで起こる疾患
- 筋肉の緊張が低く、全体的にゆっくりと発達する
- 心臓の疾患、消化器系の疾患、甲状腺機能低下症、眼の疾患、難聴などを合併することも
- 舌が突出しているといった口腔の特徴により、多くのケースで発音が不明瞭
- 知的障害の程度には幅がある(ダウン症の方のIQの平均は50と言われている)



8

## ダウン症(ダウン症候群)の子どもへの支援

- 知的障害の程度に合わせた声掛け、対応
- 身体的な疾患、体力に応じた支援
- 発音の不明瞭さは気にせずコミュニケーションを



9

## まとめ

- 障害が合併していることが多く、子どもによって状態は異なる。
- 事前に本人の状態、支援の方法の確認を!



10